

共同研究 半七捕物帳 (五)

序

「新カチカチ山」

浜田雄介
堀野朝子

「幽霊の観世物」

パオリーニ・エンリコ

「菊人形の昔」

鈴木優作

「吉良の脇指」

岸本梨沙

序

浜田雄介

本誌第十九号より開始した共同研究の第五回である。母体となっているのは大学院における近代文学の演習であり、出発点となった問題意識は第一回の序に記した通りである。

テキストは現在の流布本である光文社文庫版『半七捕物帳』を用いているが、第一巻から読み進め、その年に論考にまとまればその年に、そうでなければ翌年にという具合にゆるやかに進めて平成二六年度の本誌二二号には第四巻にいたった。以後、しばらく休憩を置いた。俗に言う煮詰まった感覚があったこともあり、大学院演習では他の捕物帖を読んだり、捕物帖から離れたり、少し空気を入れ換えた。尊敬すべき先達の浅子逸男先生から、研究というのは尺取り虫みたいに進めばよい、というような、時宜を得たアドバイスをいただいたこともあって、ゆるゆると関心を持ち続けようと考えていたのである。この間、私自身は『文芸倶楽部』誌上で綺堂と交代で探偵小説を連載した松居松葉や、戦後の風俗雑誌で活躍した島本春雄の捕物帳を読み返し、機会を得てささやかな文章を記ししたが、今年度に入って、共同研究再開に少し色気を見せると院生から応じる声もあがり、また自身の研究で人形佐七捕物帳を扱う留学生も参加するようになったので、久しぶりに腰を上げることにした。

研究内容とは無関係のようなことを記したが、本誌『人文研究』はもともと大学院生各自の自由な研究表現の場であり、共同研究の歩み方なども参考になることがあるかという思いである。寛恕されたい。

以下、各論考を通覧すると、堀野論文は「新カチカチ山」の舞台となつている武家屋敷と水路に着目する。いずれも江戸の町を語る際に言及されることの多いトポスだが、両者が絡み合つて減びてゆく浅井家のありようは、瓦解の足音を聞く幕府のものでもあつたらうか。パオリーニ論文は「幽霊の観世物」に中国由来の趣向、西洋の推理の影響、日本の伝統との関わり、といった要素の複合を見る。作品を一つの事例として「半七捕物帳」シリーズ、およびジャンルの性格を見る試みである。鈴木論文は江戸への郷愁というジャンル把握の枠組みを「菊人形の昔」に適用しつつ、時代の変遷の中に表れる暴力性や非合理という探偵小説の出自に関わる要素もまた郷愁の対象となることを指摘する。黒岩浜香などが想起もされよう。岸本論文は「縁」と「さかさま」という、ドラマツルギーをめぐるキーワードで「吉良の脇指」を読み解く。劇作家としての綺堂が「維新前後」で出版していることなどを考え合わせれば、この考察の射程は意外に広いかもしれない。

インターバルを置き、多くが新しい顔ぶれになつたためか、あらためてシリーズあるいはジャンルについての再検討がなされた回でもあつたように思う。演習ではさまざまな議論も行われたが、各論

考については基本的に執筆者が自らの責任でまとめている。『半七捕物帳』本文の引用については先に記した光文社文庫版『半七捕物帳(五)』を用い、各自で初出等を確認した。また今井金吾校訂『定本武江年表』(全三巻、ちくま学芸文庫、二〇〇三年一〇月〜二〇〇四年二月)、今内孜『半七捕物帳事典』(国書刊行会、平成二二年一月)などは基本書としてしばしば参照した。なお、各論考はそれぞれ扱った作品の謎解きや結末に触れている。

「新カチカチ山」小考

堀野朝子

梗概

『新カチカチ山』は、『講談倶楽部』昭和十年三月号に発表された。梗概は以下の通りである。

明治二十六年十一月なかばの宵。例によって半七老人を訪問した「私」は、芝居の話に付き合ううちに、矢口渡の故事に似た事件の話
を聞く機会を得る。

文久元年一月末、深川での梅見帰りの浅井因幡守を乗せた屋根船が、大川に沈むという事件が起きた。乗っていたのは、因幡守と妾のお早、娘のお春、女中三人、そして船頭の千太だった。船頭は助かったが、因幡守とお早、女中二人は溺死し、お春と女中のお信の遺体は行方不明になってしまう。

主人を失った浅井の屋敷では、家督相続が問題となる。そこで浅井家は因幡守の溺死を隠蔽し、四、五日たつてから急病頓死の届をだして嫡子小太郎の家督相続を済ませ、問題を解決した。

一方、内密に事件の真相を探索する役目を背負った半七は、沈んだ船を調べ、底に開けられた穴から、この事件が人為的に起こされたものだと考える。船底の細工は船頭の千太の仕業だとして、その背後にいる人物の正体を探るべく動く半七であったが、武家屋敷の詮議は難しく、思うように進まない。

やがて、千太の居場所を知る寅吉という船頭の死と、女中お信と若殿さまの心中死骸の発見という二つの事件が出来たことで、半七はようやく真相を掴むことができた。

すべては、女中のお信が仕組んだことだった。お信は因幡守の嫡子小太郎に惚れ込み、小太郎と添い遂げる事を願うあまり、自分と小太郎との関係を知ったお早とお春を亡きものにしてしようと考え、船を沈める算段を船宿の主人である叔父の清吉に持ち掛けたのだった。つまり因幡守は側杖を受けたに過ぎなかったのである。

この大事件により、三千石の浅井の家は潰れる。行方不明になっていたお春の遺体は、後日房州沖で鯨の腹から発見された。浅井の奥方は惨状に耐えきれず死に、共犯の清吉も牢死し、この悲惨な事件は幕を閉じた。

以上、梗概にあるように、主犯がお信であることは暴かれるが、犠牲の多い事件となっている。今回の事件は、半七の踏み込めない部分が目立つ。いわば、力及ばず敗北する半七の姿が描かれた作品になっているのである。

武家屋敷と御家騒動

江戸の街を舞台にした『半七捕物帳』では、江戸風俗を活かして物語が展開される。本稿ではその様々な要素のなかでも、武家屋敷と水路について着目してゆきたい。この二点は江戸の街の象徴として、シリーズ中に散見されるものである。例えば武家屋敷であれば、

「お文の魂」や「朝顔屋敷」をはじめとして度々舞台になっているし、水路を使った作品であれば「むらさき鯉」や本作にも繋がる「大阪屋花鳥」など、多数挙げられる。そして「新カチカチ山」もその一連の作と同じく、都市の構造を活かした作品となっている。以下、一つずつ考察していく。

本作では、詮議の対象が武家屋敷であることが鍵になっている。屋敷方を相手に半七がいかに立ち回るか、という問題が、物語の一つの筋を作り上げているのである。

作中、半七老人は、聞き手である「私」との対話の中で、江戸における武家屋敷への詮議の難しさを語っている。

〔前略〕役目だから仕方が無いようなものの、町方と違って屋敷方の詮議は面倒で困ります、町屋ならば遠慮なしに踏み込んで詮議も出来ますが、武家屋敷の門内へは迂闊にひと足も踏み込むことは出来ません。殊にわれわれのような商売の者は、剣もほろろに追い払われるに決まっていますから、いわゆる盲の垣のぞきで、外から覗くだけで内輪の様子はちっとも判りません。これには全く閉口です。〕

このように、岡っ引上がりの半七老人の言葉で、屋敷方の探索の困難な様子が語られることで、「新カチカチ山」における事件の事情が良く伝わってくる。半七は、不利な立場で捜査しなければなら

かつた。

さらに本作では、探索の依頼主も屋敷方となっている。死んだ浅井因幡守の親類筋に加え、その奥方の里方からも、内密に調べてほしいという依頼であった。探索の相手も武家屋敷、依頼人もその親類縁者の屋敷方という今回の事件は、半七にとつて面倒この上ない一件となつていたのである。実際、本作では屋敷方は「いづれも申し合わせたように門前払い」で協力の無いまま終幕を迎えている。武家屋敷が詮議の対象というのは、物語に大きな空白部分を生むのである。そして、その難しい状況下で多方面からのアプローチをかけていく様子というのが、物語の展開を面白くする一つの要素だと言える。

また、三千石の家の主人が乗った船が沈み、主人と妾が溺死したという事件の内容や、右に述べたような武家屋敷がらみの不審な動きから、本作の始まりは御家騒動をおおわせるものとなつている。例えば有名な加賀騒動や伊達騒動など、読み手は具体的な事件を想起することも可能だろう。それは作中の半七も同じである。彼の推理は次のように展開した。

一方に秘密主義を取りながら、一方は藪を叩いて蛇を出すようなことをするのはどういふわけか（中略）或いは屋敷内や親類じゅうの議論が二つに分かれていてのではないか。一方は家名を傷つけるのを憚つて、何事も秘密に葬るがよいと云い、一

方は飽くまでも其の正体を確かめて、その罪人を探し出すがよいと云う。要するに、何事もお家には換えられぬという弱気筋と、たとい家をほろぼしても屹と善悪邪正を糺せという強気筋とが二派に分かれて、こういう結果を生みだしたのでは無いか。

*

妾のお早に子供でもあればお家騒動とも思われるが、お早に子供は無い。本妻には男と女の子がある。しかもみんないい人であるという。それではお家騒動が芽をふきそうもない。

こうした推量から察するに、半七の脳裏にも「お家騒動」という言葉がよぎつたのは明白である。しかし、騒動の火種がどこにも見当たらなかつたのである。「みんないい人」というのも、お信の叔父の証言に過ぎないが、屋敷への詮議が難しい以上、自身の目で内部の事情を確かめることもできない。何よりお蘭から熱心な依頼があつたとあれば、御家騒動は御門遣いの推理のようである。大きな黒幕を期待した読み手を裏切る形で探索は進んでゆく。武家屋敷という大きな空白部分に、半七の敗北の一因があると言えよう。

武家屋敷がらみの問題は他にも指摘できる。半七も言うように、今回の事件は「まかり間違えば浅井の屋敷は潰れ」てしまう大事になリかねない。にもかかわらず、お蘭の里方である菅野の家からは「もし又なにかの機関（かみか）でもあつたようならば、係り合ひの者一同を容赦なく召捕つてくれ」と頼まれ、しかもそれはお蘭が言いだしたらし

いと知らされるのである。

お蘭がなぜそのような執着をみせるのか。初めに依頼を受けた八丁堀同心の拝郷が語るには、因幡守は評判の美男で、お蘭にとつて所謂「惚れた亭主」らしい。それが捨て身の依頼の理由だ、というのが拝郷の考えである。いっぽう半七は、その「不審」を先に引用したように「何事もお家には換えられぬという弱気筋と、たとい家をほろぼしても屹と善悪邪正を糺せという強気筋とが二派に分かれて、こういう結果を生みだしたのでは無いか」と考えるわけである。

その茫然とした考えに対し、子分の幸次郎の具体的な鑑定が、次の引用である。

「恐らく主人を殺すつもりはなかった……。主人はいつもの通りに陸を帰ると思っていたところが、どうしてか船で帰ることになったので、云わば飛ばつちりの災難を受けたような形かと思われませぬ。女中三人は勿論そば杖でしょうから、そうなるおと妾のお早か、お嬢さまのお春か、その一人が目指されることになります。年の行かねえお嬢さまが殺されそうにも思われねえから、目指す相手はまあお早でしょうね」

幸次郎は右のように仮定し、細工はお蘭の手によるものだと推理したのである。そして執着しているように振る舞うのは、故意ではないにせよ、亭主を殺してしまった「自分のうしろ暗いのを隠そう

とする為」なのではないかと半七に告げる。

以上のように、各々考えは示されるが、作中の情報からは結局、お屋敷の不審な動きの理由は分からない。このお屋敷方の「不審」の正体は明かされないまま幕引きとなってしまうのである。

他にも、共犯者である船頭の寅吉が殺された理由も曖昧であったりと、お屋敷関係の不明な点を列挙してはきりがない。こうした合理的でない様は、『半七捕物帳』の他の作品においても見受けられ、読み手としては消化しきれないわけだが、ことに「新カチカチ山」においては、お屋敷という事情に敗北する町方の岡つ引の物語として、帳尻合わせの展開なのだろう。それでも、江戸風俗や人情の機微、限られた情報で推理していく面白さが読み手を惹きつける。あるいは、半七老人の語る岡つ引商売の辛さや蘭がゆさの伝わる一件だったと言えるかもしれない。

本作は、半七老人の痛快な武勇伝ではない。むしろ事件は惨たらしい結果となり、行方不明の遺体も鮫の腹から発見されるというのだから、寝覚めが悪い。しかし『半七捕物帳』シリーズの一つの側面——敗北する半七の存在を描いた一篇として、半七老人の「むかし話」を盛り立てる役割を果たしているのである。

『半七捕物帳』と「水」

もう一点の「水」の要素も見ていきたい。

誰もが知る「カチカチ山」を掲げた本作は、どこにその要素を与

えられているのだろうか。まずは、作中で「カチカチ山」が登場する箇所を引用する。

「子供の話にある、カチカチ山の狸の土舟というわけですね。その矢口渡に似たような事件があるんですが……。恐らく太平記か芝居から思い付いたんじゃないでしょうか」

*

「それにしても、仕事があんまり暴つばいぜ。いくらおめえ達の商売でも、カチカチ山の狸の土舟のようなことをして、殿さまを始め大勢の人を沈めて……」

前者は半七老人の語りで、後者は事件の真相を暴いた際に船宿の主人清吉に向けられた言葉である。どちらも「狸の土舟」が付属しているように、本作は「カチカチ山」の物語を踏襲したのではなく、水に沈む「土舟」という部分的な物を象徴としている様である。これは同じく「矢口渡」の船にも言えることで、故事に倣つての発言ではなく、水没する船という一つの道具から着想した発言といえる。

同じような発想が、作中にもう一つある。それが「大阪屋花鳥」である。女中のお信には「水ごころがある」のだろうとする自分の推量を聞いた半七は、「大阪屋花鳥の二代目か」と呟く。かつて自身が係わった「大阪屋花鳥」事件を想起したのである。しかし、ここでの半七の発想は、かつての事件の全貌を見渡してのことではなく、

花鳥その人の持つ一つの特技を思い浮かべている。つまり、「水ごころがある」という部分に着眼した発想である。

「カチカチ山の狸の土舟」や「大阪屋花鳥の二代目」という発想から見るに、半七は、事件の「機関」の中にある一つの事物を注視し、そこから着想していく傾向にあるのだと分かる。「土舟」や「矢口渡」は水難を意味し、物語のテーマとして沈みゆく泥舟を据え、そして花鳥は入水の先入観を利用して盗みをした女性である。「新カチカチ山」は水路の発達した江戸の姿を活かした作と言えるだろう。

そこで、「大阪屋花鳥」に派生する内容ではあるが、「水心」という言葉に着眼点をおいて、本作を考えてみたい。

「御承知の通り、深川は川の多いところですが、……」と半七老人が言う通り、事件の現場は幾本もの川が流れる場所である。それは搜索が難航し二人の死体が見つからないという状況を作り出し、女中が怪しまれずに身を隠す機会を与えた。また、河岸の船宿が一枚囁んでいたのも、暗躍していた船頭寅吉の死骸が川に捨てられたのも、ひとえに水路の張り巡らされた街である江戸という舞台を活用している。

ここで、江戸と水路の関係性について、鈴木理生氏による解説を引用しておく。

江戸城を中心とする江戸湊の水路は幕府の都市計画——平川・小石川・谷端川のつけかえ、日比谷入江の埋立、小名木川の設

計などの自然改造を中心に運河網と河岸が形成され整備された。

概括的にいえば、この運河網が完成したのは元禄一〇年(一六六九)前後で、その後いくつかの部分の変更はあったが、全体としては昭和二〇年代前半までの約二〇〇年間(原文ママ)、大都市江戸―東京の都市機能の大きな部面をささえてきた。

この運河網は人々の交通路であり、大半の物資の流通路であり、したがって水路の大部分が市場であり、広場でもあった。

江戸―東京の人々の風俗・行動の独自性(ローカルカラー)は、山手、下町をとわず水路の存在が大きな前提になっていたといってもよい状態にあった。

つまり『半七捕物帳』の舞台である江戸は、水の存在抜きには語れない、「水の都市」「水の都」の名を冠する世界なのである。

そして事件の真相は、お信が女でありながら泳ぎが出来たことが鍵となっている。「水の都市」江戸を舞台にした捕物帳ならではの設定だろう。結末部分で明治の現代に戻った後、聞き手の「私」が半七の言葉を借りて、「お信は大阪屋花鳥の二代目ですわね」と言うのに対し、半七老人は次の様に語っている。

「そうです。子供のときから築地の河岸に育ったので、相当に水心があつたと見えます。こんにちでは海水浴が流行って、綺麗な女がみんなぼちゃぼちゃやりますが、江戸時代には漁師の

娘ならば知らず、普通の女で泳ぎの出来るのは少なかったのです。花鳥もお信も泳ぎを知らなかったら、悪いことを思い付かなかつたかも知れません」

要は、今回の事件は、「普通の女で泳ぎの出来るのは少なかった」時代に、「水心があつた」ことで成立した犯罪だった、という締めくくりになっているのである。このように当時のことを語る半七老人を思うと、「水心」があるというだけで花鳥を思い浮かべ、「二代目」などと付けてしまうのも頷ける。それだけ珍しかったということの現れでもあるのだろう。

ここで何より印象的なのは「花鳥もお信も泳ぎを知らなかったら、悪いことを思い付かなかつたかも知れません」という一文である。例えば、その花鳥の登場した「大阪屋花鳥」の作中には、「よくよく水に縁のある女で、これも何かの因縁でしょう。」という半七老人の台詞がある。この「女」というのは、花鳥が替え玉を演じたお節という器量の良い女のこと、これはお節の最期が古井戸への投身だったことに対する言葉である。こうして「水心」で繋がる二作を眺めると、江戸の街において、人と「水」との間にある縁というのは、何か特別な意味を含んでいるようである。

江戸時代における「水」というのは、現代とはまた違った印象を与える存在だったのでないだろうか。それは、身近でありながら、下手に縁をもつと身を滅ぼしてしまうような、異質な存在だったの

かもしれない。

こうした「水」への印象について、『水の都市 江戸・東京』⁽⁸⁾では、深川に生まれ育った川田順造氏の著作を例に挙げ、次のように指摘する。

忘れてはならないのは、下町育ちのある年齢以上の人々は、水辺に必ずしも明るいイメージをもっていないという点である。誰もが必ず語るのは、川や掘割に流れついた土左衛門の姿を見た経験である。

また、水運利用や江戸の風俗を総括して、以下のようにまとめられている。

水辺は、前近代の人々にとつては、怖く暗いイメージを背後に持ちながら、恵みをもたらすものとして、最大限に活かされ、経済活動の場となり、さらには人々にとつての楽しみの舞台となったのである。

こうした指摘を念頭におくと、本作にとつての「水心」の重要性がはつきりしてくる。前近代における女と水の関係は、死を連想させる暗いイメージのもとにある。それを打ち破る「水ごころがある」女というのは、珍しいという以上に、異質な存在だったのだろう。

そして「水に縁のある女」というのは、「怖く暗いイメージ」を大いに含んだ言葉だと言える。「新カチカチ山」は、江戸の風物としての水辺への憧憬の裏に、人々の抱く水への畏怖を捉えた、「水の都市」にふさわしい作品と言えるだろう。

おわりに

本稿では、「新カチカチ山」を、『半七捕物帳』の中でも半七の敗北という一側面を描いた作品と位置づけ、「武家屋敷」の特殊な事情が敗北の最大の原因としてきた。

お屋敷事情に振り回される本作の内容は、愉快な物語ではない。しかし、先に述べたように、事件の発端から解決まで、一貫して「水の都市」としての江戸を存分に描き出した作品として捉えることができる。

そこで最後に、江戸の街を象徴する「武家屋敷」と「水の都」という二つの要素の、本作における意義を考えておきたい。

「新カチカチ山」は女中のお信と妾のお早の確執が事件の要因となっている。お信は河岸の船宿で育った女で町方の者であり、作中でもその育ちゆえの「水心」が利用されたことは先に述べた。一方、お早の作中での描かれ方は、御家への忠義立てが強調されたものがあり、小梅の植木屋の出身といっても、その行動からは屋敷方の人間としての自覚が窺われる。

この重要人物二人の関係は、明確な対比、つまりは町方と屋敷方

という性質の対比がみられるものである。この性質の違いと、前述した江戸の都市空間の二つの要素が深く関わる様子というのが本作の一つの独自性と言えるだろう。

浅井の屋敷は大きな家で、事件が明るみに出た際は、御家騒動が想定されるほどである。しかし、御家の人は「みんないい人」で騒動の要因は見当たらない。

そのような「みんないい人」の御家が、取り潰されるほどの事件が起きたのは、この二人の女の立場や考え方、ひいては性質の差からのすれ違いが元凶だった。悲しいかな、どちらも自己の想い——お信は若殿様への愛を、お早は御家への忠義を貫いた結果であり、本来悪事を働こうという邪な気質は持ち得なかったのかもしれない。

これがただの町人と武家という対立だけならば、町方と屋敷方という世界の隔たりが機能し、お信の強行はここまで大事にはならなかった。しかしそこに「水心」という要素が加わった結果、この悲劇は成立してしまっただと言えろ。

後に半七老人が語る「泳ぎを知らなかったら、悪いことを思い付かなかったかも知れませんが」という言葉は、まさにことの顛末を表した一言であつただろう。

江戸の風物としての水辺——それは、浅井家の梅見のような娯楽もあれば、船も人も沈んでしまう怖さや、果ては大海に繋がっているという恐ろしさもある。江戸の人々にとって水辺は、身近でありながら、そこに暗い影をみずにいられないものだった。「新カチカチ

山」事件は、そうした日陰の面も含め、「水」により物語に江戸情緒を漂わせる効果を發揮した一件であり、「水」により悲劇的な最期を迎えた物語であつた。

注

(1) 作中「ほんとうを云うと、(中略)一月はまだ万延二年のわけですが……。」とある。『定本 武江年表』(筑摩書房、二〇〇四年二月)で確認すると「革命の運によりて、万延元年を文久と改元あり。二月二十八日、御布告あり。」との記述がある。

(2) 「お文の魂」(『文芸倶楽部』大正六年一月号)

(3) 「朝顔屋敷」(『文芸倶楽部』大正七年三月号)

(4) 「むらさき鯉」(『講談倶楽部』大正十四年八月号)

(5) 実在した女芸者大阪屋花鳥を登場させた「大阪屋花鳥」(『講談倶楽部』昭和九年十一月号)の事件を指す。作中、泳ぎの得意な花鳥が替え玉を演じ、川に身を投じて死んだことになって盗みを働いた。

(6) 半七老人は自身のむかしの身分を「石燈籠」(『文芸倶楽部』大正六年二月号)において以下の様に語っている。「町奉行から小者即ち岡つ引に渡してくる給料は一カ月に一分二朱というのが上の部で、悪いのになると一分くらいでした。(中略)つまり初めから十露盤が取れないような無理な仕組みに出来上

がっているんですから、自然そこにいろいろの弊害が起つて来て、岡っ引とか手先とかいうと、とかく世間から喰扱いされるようなことになってしまつたんです。」

(7) 鈴木理生『江戸の川・東京の川』（日本放送出版協会、一九七八年三月）

(8) 陣内秀信、法政大学陣内研究室編『水の都市 江戸・東京』（講談社、二〇一三年八月）

(9) 川田順造『江戸Ⅱ東京の下町から——生きられた記憶への旅』（岩波書店、二〇一一年十一月）

「幽霊の観世物」小考

パオリーニ・エンリコ

一、基本的情報・概要

「幽霊の観世物」は『講談倶楽部』昭和十（一九三五）年七月号に発表された、『半七捕物帳』シリーズに属する短編小説である。事件発生順で、半七が直接関わらない事件を除くと、二〇番目の事件であり、半七は三二歳である。筋書きを簡単に紹介したい。

七月七日に、ろくろ首の見世物を見ている「私」が半七老人と出会う。数日後、半七老人は次の事件を語る。嘉永七（一八五四）年七月二十六日に、浅草の幽霊の見世物小屋で、女の死体が発見された。その女は駿河屋のお半という照降町の下駄屋のおかみで、八年前に夫に死なれ、三年前に隠居して店を養子の信次郎へ譲った。死体を発見したのはお半の後に見世物小屋に入った長助という下谷の大工である。医者の検視で傷の跡を飲まされた気配もなく、幽霊におびえて死んだと考えられる。半七は自分の松吉からその話を聞いて、いろいろな点を不思議に思つて捜査を始める。自分の松吉と善八の報告によると、お半の早隠居は怪しくて、お半にも信次郎にもふさわしくない愛人がある。お半は音造という悪党と関係を通じて、信次郎はお米という卑しい並び茶屋の女を情婦としている。半七は長助とも話し、松吉からお半と長助の間に見世物小屋に入った三人の人相風体を聞いた後、自分の善八と亀吉に見世物小屋の出

口を見張らせ、自分が客に扮して見世物小屋に入る。予想した通り、半七は幽霊や化け物の作り物の中に人形より怖い、幽霊に化けた本物の人間が混じっていると確認する。その中の二人がお半の殺害を目撃したという白状により、半七は下手人が三人で、その中の二人は信次郎とお米だったと知る。だが、直接お半を殺した三人目の下手人が不明なので、それが判明してから三人とも一気に逮捕することに決める。その夜、信次郎は音造に切られるが、信次郎とともにいた大工の清五郎が音造を追いかけておさえる。それで事件が解決した、と現在の半七老人は謎解きを始める。お半と信次郎は、義母と養子にもかわからず男女の関係にあり、お半が早隠居したのもそれをうまく隠すためだった。音造は偶然その関係を知り、お半をゆすりはじめて、無理に自分のものにするに至った。信次郎は嫉妬して、お米と関係を結んだ。清五郎はお米のおじで、駿河屋の財産を手にするために、お米を嫁に出そうと持ち掛ける。ここでお半は邪魔で、嫉妬深い信次郎は清五郎に説得されて、お半を殺す計画が実行されることになった。幽霊の見世物小屋でお半を殺して、幽霊におびえて死んだと世間に思わせる計略はすべて清五郎の考えで、金槌でお半の頭に釘を打ったのも清五郎だった。その釘は現在の検視ではすぐにはわかるが、江戸時代の検視ではみのがされたと半七老人は説明する。信次郎は切られてから二日目に死に、清五郎も音蔵も死罪に処せられたが、お米はうまく江戸から逃げた。

二、複数の要素からなる半七の世界

捕物帳は探偵小説と時代小説の境界線上にあると言える。捕物帳の、他のジャンルとはつきり区別できる特徴が何かというのは簡単な問題ではなく、唯一の決定的な答えがあるわけではない。それは捕物帳にさまざまな要素が混在するからではないか。確かに『半七捕物帳』は、そのような印象を与えるだろう。本格推理小説と違って、推理より人間関係が中心にあるにもかかわらず、推理が重要な役割を担っていることは否定できない。だがこのような議論は「捕物帳はこのようなものだ」ではなく、「捕物帳はこのようなものではない」のような背理法による定義になりがちなので、ここにはそのような難問には立ち入らず、捕物帳の複合性だけを論じたい。

中国由来の趣向や西洋のシャーロック・ホームズの詳細な記述も取り入れ、江戸風俗などの豊かな知識を駆使する半七の世界だが、中国・西洋・日本の三つの要素は『半七捕物帳』をなすといっても、常に安定した比重を占めているわけではない。中国の影響などが見られない小説もあれば、半七があまり（西洋から取り入れた）推理を働かせずほとんど観客として物語の展開を見守る小説もある。その中で「幽霊の観世物」はこの三つの要素をはっきり含んでおり、事例研究の対象にするのにふさわしく思われる。

三、中国／殺害方法

日本の探偵小説の前身といえる「大岡政談」のような裁判小説は、

中国の『棠陰比事物語』などを開祖と仰ぐ。そのことを考えると、捕物帳だけではなく、探偵小説一般に中国文学の影響が大きいと言えよう。しかし、「幽霊の観世物」はより直接的な影響が、殺人方法にはつきりと現れている。

「幽霊の観世物」のお半の殺害は、傷跡も毒を飲んだ気配もみつからず、はじめは死因が判明しないが、半七によって、凶器は金槌だったと判明する。小説に以下の部分がある。

本人の清五郎の白状によると、まだ驚いた事がありました。お半のあたまを鉄槌でがんとくらわしたばかりで無く、長い金釘を用意して行って、頭へ深く打ち込んだのです。こんにちならば検視のときに発見されるでしょうが、むかしの検視はそんな所まで眼がとどきません。男と違って、女は髪の毛が多いので、釘を深く打ち込んでしまうと、毛に隠されて容易に判りません。これなぞも大工の考えそうなことで、長い釘を一本打ち込むのも、素人では手際よく行かないものです。

半七老人の説明からわかる通り、奇妙で独創的な殺し方でありながら、綺堂が考え出した趣向ではなく、有坂正三氏が指摘するように、いろいろな中国ミステリーにも登場するやり方である。たとえば、『南村輟耕録』(一三六六年)に「勘釘」という小説がある。嫂が姦通相手と共謀して兄を殺したと訴える者があるが、役人が死体を調

べても無傷のようなので困っている。役人の妻が釘を撃ち込まれた可能性があるから脳天を調べるように勧めると、やはりそうである。事件落着と思われたが、妻の知恵が不思議に思われて、調べてみるとその先夫もはつきりしない死に方をしていった。先夫の死体をあらためて調べてみると、これも脳天に釘を撃ち込まれた。原文は短いのので、全文を引用したい。傍線の部分は殺し方についての部分である。

姚忠肅公至元二十年癸未為遼東按察治武平縣民劉義訟其嫂與其所私同殺其兄成縣尹丁欽以成屍無傷憂慙不食妻韓問之欽語其故韓曰恐頂凶有釘塗其跡耳驗之果然獄定上讞公召欽諦詢之欽因矜其妻之能公曰若妻處子邪曰再離令有司開其夫棺毒與成類並正其辜欽悸卒時比公為宋包孝肅公拯云⁴

綺堂の『中国怪奇小説集』にはこの話が「女の知恵」という題で含まれている。これに似た事件は『搜神記』(四世紀)などにも登場し、中国に古くから使われてきたトリックのようである。綺堂がこれらの書を読んでいたのであろうことは有坂正三氏も記している。

ちなみに、『新青年』昭和十一年(一九三六)年一月月号に掲載された内田長平の「脳天の釘」は、昭和九(一九三四)年八月に台湾で起こった、釘を使った殺人事件を紹介している。そして「本事件の殺人法は、釘を打込んだ殺人法である事は明らかだが、斯かる殺人法は日本内地では未だ聞いた事がない。(中略)支那では古くから、人に悟られ

ない巧妙の殺人法が攻究せられたらしい」と説明する。この文章自体は「幽霊の観世物」から一年ほど後に発表されたものだが、台湾の事件そのものは「幽霊の観世物」発表の一年前に起こっているので、綺堂が何かしらの情報を得ていた可能性はあろう。あるいは逆に、内田長平が「幽霊の観世物」に触発されたのかもしれない。

綺堂はその原典をそのまま取り入れたのではなく、釘がみつからなかったのは女の髪が男と違って長いからであり、そんな趣向を考え出しうまく実行できるのは大工のほかにないとする。その話は詳しく描写されて納得しやすい。そこには綺堂のスタイルが生かされていると言えるだろう。

四、西洋／ホームズのな推理方法

西洋の影響という、すぐ浮かんでくるのはシャーロック・ホームズである。綺堂が『半七捕物帳』を書き始めたのはホームズに触発されてであることは周知の事実だが、ホームズの影響の中で一番大事なのは推理の比重であると思われる。「幽霊の観世物」の半七は非常にホームズ的な態度を取り、以下のようにつまらなそうなことから見事な推理をする。

しかしその話を聞いた時に、わたくしは何だか信次郎を怪しく思ったんです。義母の帰りが遅いからといって、幽霊の観世物を見て死んだんだらうと考えるのはあんまり頭が働き過ぎる

ようです。本人は当日花川戸へ行って、その噂を聞いて来たと言うんですが、噂を聞いただけでなく、何もかも承知しているんじゃないかという疑いが起こったんです。

もう一つには、お半という女隠居が自分ひとりで左の路を行つたことです。連れでもあれば格別、女のくせに右へは出ないで、左へ行つたのが少し不思議です。路に迷つたといつても、右と左を間違えそうにも思われません。おそらく誰かに連れて行かれたのじゃあ無いかと思われます。そうなると、信次郎も当日浅草へ行つたというのが、いよいよ怪しく思われなくてもありません。だんだん調べてみると、お半のあとから木戸をはいた若い男の年頃や人相が信次郎らしいので、まず大体の見当がきました。

*

（「お半を殺したのは大工らしいというのは、鉄槌からですか」という「私」の問いに対して 稿者注）

「そうです。喧嘩でもして人を殺すならば、手あたり次第に何でも持ちますが、前から用意して行く以上、手頃な物を持って行くのが当然です。疵のあとを残さない用心といつても、わざわざ鉄槌を持ち出していくのは、ふだんから手馴れている為だろうと思つたんです」

このような推理はホームズの考え方を連想させる。一例を挙げる

「The Red-Headed League (赤毛組合) の冒頭部分ではホームズもワトソンも訪れて来た客を観察する。ワトソンにはごく普通の人とか見えない客は、ホームズにとって推理の宝庫である。」

ホームズは、わたしが観察していたことを目ざとく見てとった。そしてわたしのもの問いたげな目付きに気づくと、微笑を浮かべて頭を振った。「このかたは昔肉体労働をされていた。嗅ぎ煙草を愛用しておられ、フリーメイソンの会員であり、中国にいらしたことがあり、また最近かなりの量の書きものをなさった。これ以外には、明確な事実として推理できることはないね」

ウィルスン氏はびっくりして椅子から飛び上がり、人差し指で新聞を抑えたまま、ホームズをじつと見つめた。

「いったいぜんたい、なぜそんなことまでわかるんですか？ ホームズさん。たとえば、わたしが肉体労働をしていたことなんか。たしかにそのとおりです。わたしは船大工から身を起こしたんですから」

「あなたの手ですよ。右手が左手より完全にひと回りは大きいですね。右手を使う仕事をしてらしたので、筋肉がよけいに発達したんです」⁽⁵⁾

以下、ホームズは驚く相手に書き物をしたことや中国にいたことなどを推理した根拠を次々に説明するのである。

推理だけではなく、半七の態度にはホームズ的な行動がもう二つある。一つ目は小屋の偽幽霊を罠にけることである。ホームズが扮装して下手人などを騙すのと同じように、半七は客に扮装し、「髻節を取られない用心のために、(中略) 髻と手拭のあいだに小さい針金を入れて置」き、偽幽霊を騙し白状させる。二つ目は勝手に行動してワトソン役に最後の謎解きまではつきりした説明をしないことである。半七は考えて結論を出す時も、偽幽霊を罠にける時も、自分たちに命令を下しはするが、その理由などを一切述べない。もちろん謎解きを最後に置くのはホームズ特有の行動ではなく、推理小説一般に使われている趣向であるが、確かに西洋から取り入れた趣向であると言えよう。

五、日本／時代の流れと見世物小屋

最後に、日本の要素について論じたい。もちろん『半七捕物帳』は日本を舞台にするが、ここで「日本の要素」と言うのは、特に日本の伝統的な面などである。半七の物語はよく江戸時代の風俗などを紹介し、物語の中に重要な役割を果たさせ、江戸時代と明治時代の比較もする。また、人間関係を中心とする面も、伝統的な草双紙や芝居(綺堂は有能な劇作家である)の影響を受けているので「日本の要素」と言えよう。「幽霊の観世物」の場合、特に見世物小屋が、綺堂の江戸文化の造詣の深さを物語る。いくつかの事典で「見世物」の項をひくと、『時代小説職業辞典』⁽⁶⁾に「両国広小路・上野広小路な

どの火除地や寺社の境内に設けられた」とあるが、「幽霊の観世物」の見世物小屋は浅草、仁王門のそばにあり、浅草寺の境内にあることは史実に忠実である。また、『江戸学事典』⁷⁾で「江戸にあつて両国・浅草といった盛り場が見世物興行の中心地になった」とあり、『江戸東京学事典』⁸⁾に「江戸の闇が東京にそのまま生きつづけている空間といえは浅草であろう」とあり、探偵小説の舞台設定としてもびつたり合うと思われる。

綺堂は伝統的な風俗だけではなく、法律や行政機関も生き生きと描写する。事件が浅草寺の境内で起こったことには既に触れたが、「幽霊の観世物」には以下の文章がある。

これは浅草寺内の出来事であるから、寺社奉行の係りである。それが他殺でなく、幽霊を見て恐怖のあまりに心臓を破つて死んだというのでは、別に詮議の仕様もないので、事件は手軽に片付けられた。

〔中略〕

観世物小屋の一件は寺社方の支配内であるから、半七は翌あさ八丁堀同心の屋敷へ行って、今度の一件に対する自分の見込みを報告し、あわせて寺社方への通達を頼んで帰った。寺社方に捕り手は無いのであるから、その承諾を得れば町方が手をくだしても差し支えはない。

『図説・江戸町奉行所事典』⁹⁾に「(寺社奉行は)幕府直属の与力・同心の配属がないので自分の家臣から寺社取次・大検使・小検使・吟味物調役・同心を設けてその職能を果たした」とあるように、寺社奉行は町奉行と違って自分の家来を使わなければならず、奉行が辞任する時に家来もみんな辞任するので長く経験を積むこともできなかった。綺堂のいう「捕り手は無い」はおそらくそういう意味に取られるべきだろう。つまり、全く逮捕できる役人がないわけではなく、ただ未熟な役人しかおらず、熟練した捕り手や岡つぎのような部下がないだけであろう。

また、寺社奉行と町奉行の關係は必ずしも友好的ではなく、支配権の紛糾も多くあった。本来なら門前町は寺社奉行の範囲内だったが、町奉行や町人の要望も重なって、延享二(一七四五)年に境内を除く寺社地の町民の支配権は町奉行に移管された。浅草寺の仁王門で首をくくって、石垣の上に落ち、死体は半分は境内で半分は町奉行の範囲内で、どうすべきか戸惑ったという面白い逸話もある。「幽霊の観世物」の事件は浅草寺の境内であるから、間違いない寺社奉行の範囲内で、半七が慎重な態度で八丁堀に報告に行くのは無理もないだろう。

この「日本の要素」にはこれ以外にも検討に値する面がある。江戸時代と明治時代の対照的な性格を描くのは半七捕物帳の特徴と言える。それは、二つの時代の優劣を描くためではなく、江戸時代・明治時代の性格をより深く鑑賞するためと思われる。

この小説の中では、半七は江戸時代の代表者で、語り手の「私」は明治時代の代表者であるということは他の小説と同じだが、二人の相対的關係が詳しく描写されている。冒頭部分に「私」は職場である銀座の新聞社から帰る途中で、ならんでいる露店を歩いている。

観世物は劍舞、大蛇、ろくろ首のたぐいである。私はおびた
だしい人出のなかを採まれながら、今や河岸通りの観世物小屋
の前へ出て、ろくろ首の娘の看板をうつとりと眺めていると、
黙って私の肩をたたく人がある。振り返ると、半七老人がにや
にや笑いながら立っていた。洋服を着た若い者が、口をあいて
ろくろ首の看板をながめているなどは、余りいい図ではないに
相違ない。飛んだところを老人に見つけられて、私は少々赤面
したような気味で、あわてて挨拶した。

この描写だけでも、半七老人と「私」の価値観の相違がよくわか
るだろう。西洋化した若者として、「私」は観世物のような古めかし
いところで見つけられて恥ずかしくなる。一方この出会いをきつか
けに、半七老人が語る事件は江戸時代の見世物小屋を題材にする。
ここにも江戸時代と明治時代の対照が見られるだけではなく、見世
物小屋が二つの時代を繋ぐことになる。江戸時代の見世物小屋（正
確には幽霊の見世物小屋）は、怖いもの見たさを誇りつつも迷信を
信じる江戸っ子を引き付けるとはいえ、神秘的な雰囲気満ちてお

り、娯楽より肝試しの場としての役割を果たす。他方、明治時代の
見世物小屋は恐怖の対象ではなくなった上、過去の悪習とまでは言
えなくとも、近代人にとって関係があると思われることが恥ずかし
いほど、無用の遺風と見做されるようになった。江戸を代表する半
七の見世物小屋は怖いところ、いかがわしいところ、犯罪が起きう
るところ、そして半七自身が手柄を立てるところであるが、東京を
代表する「私」にとつての見世物小屋は単にやっかいなところ、ま
ともな人間にふさわしくないだけのところである。江戸時代に特別
な意味を持つ風俗が明治時代に面倒で滑稽なものになることは、よ
くあることである。

江戸時代の半七・明治時代の「私」・昭和時代の読者は皆見世物小
屋を知っているし、見世物小屋は形として江戸時代から昭和時代ま
で残っている。しかし、「江戸の闇」を代表する見世物小屋は「東京
の闇」ではない。江戸っ子の見方と東京人の見方は非常に違い、同
じ見世物小屋がまったく異なった印象を与える。「幽霊の観世物」に
現れる見世物小屋は時代の流れを象徴するかのようになり、江戸時代と
明治時代を繋ぎながらもはっきりと分離すると思われる。

六、まとめ／『半七捕物帳』の複合性

『半七捕物帳』は、捕物帳として、推理小説と時代小説という二つ
のジャンルの境界線に置かれている。シリーズの一つである「幽霊
の観世物」は、中国から借りた殺害方法、西洋的な推理、日本の伝

統的な見世物、という形で三つの文化の要素を取り入れ、また江戸と明治という二つの時代を描いている。事例として分析した本作に限らず、『半七捕物帳』はジャンル、文化圏、時代という三重の境界線を跨いでいると言えるのではないか。

注

- (1) 何年かはっきりと書かれていないが、『半七捕物帳事典』によると、「私は銀座の新聞社に勤めていた」という部分から、明治二十六年か二十七年と推定できるという。
- (2) 小説には「安政元年」とあるが、嘉永を安政と改元されたのは旧暦十一月であるから、安政元年には七月がなかった。
- (3) この章の情報は主に有坂正三『半七捕物帳』と中国「ミステリー」(文芸社、二〇〇五年九月)による。
- (4) (元) 陶宗儀撰『南村輟耕錄二』(張元濟他撰「四部叢刊三編」第三七三冊、吳潘氏滂憲齋藏元刊本) 八二頁、引用は「Chinese Text Project」<http://ctext.org/library.pl?i=en&file=80663&page=82> による (二〇一七年十一月二九日閲覧)
- (5) アーサー・コナン・ドイル著、日暮雅通訳『シャーロック・ホームズの冒険』(光文社、二〇〇六年一月) 六〇～六二頁
- (6) 歴史群像編集部編『時代小説職業事典』(大江戸職業往来)

(学研教育出版、二〇〇九年十一月)

(7) 『江戸学事典』(弘文堂、一九九四年二月)

(8) 『江戸東京学事典 新装版』(三省堂、二〇〇三年三月)

(9) 笹間良彦『図説・江戸町奉行所事典』(柏書房、一九九二年一月)

(10) 大隈三好『捕物の歴史』(雄山閣、一九七三年十月) 一〇五頁

「菊人形の昔」小考

鈴木優作

梗概

「菊人形の昔」の初出は『講談倶楽部』一九三五年八月、原題は「菊人形」である。梗概を以下に記す。

一八六一（文久元）年九月二四日、団子坂では忠臣蔵の菊人形が大評判で繁昌していたが、その最中に一つの事件が出来た。横浜の居留地に来ている英国商人の男女三人が別手組二人を連れて菊人形を見物に来た。坂下の空地に馬をつないで坂を登ると、混雑の中で一人の商人が紙入れを抜き取られた。すれ違った女をpushさえると、何も取っていないと言う。騒ぎを見ていた日本人は、英国人が濡衣を着せたと行って騒ぎ始めた。野次馬は次第に増え、一行は馬を置き捨てて命からがら逃げた。別手組が空地へ戻ると、西洋馬と日本馬が一匹ずつ消えていた。八丁堀同心丹沢五郎治に呼ばれ、半七が詮議を始める。

二六日、半七は幸次郎と団子坂へ行き聞き込みをする。紙入れを取ったのは蟹のお角という巾着切りの女のようなのだ。坂下の空地へまわると、草に埋もれた古祠のかげから市子が現れ出た。荒物店の女房の話では、市子はおころと言い毎日祠に参詣に来るのだが、狐使いという噂があるという。また、団子坂の一件の話となると、年増の女が馬を引っ張って行ったのを見たという。そして、おころの隣

家の女房によると、おころには息子があつた。この屋敷奉公をしてゐるさうである。

翌二七日、お角の居所を幸次郎が突き止める。長蔵と平吉という男が近しく出入りしており、平吉は本郷片町辺の屋敷にゐるらしい。平吉とは屋敷奉公をしているおころの息子ではないだろうか。半七は考える。

二日ばかりは音沙汰なし。馬を売りに来たという話ほどこの博労にもなかつた。半七は、近在の大きい農家か武家屋敷の内につないであるに相違ないと呪む。

一〇月朔日、おころの死体が空地の古祠の前で発見された。激しい格闘の跡、頸を鋭い爪で強く刺されたような形から、近所の者は狐に殺されたのであらうと驚き恐れる。

通夜の晩、空地の古祠の方角へ一つの黒い影が忍んで来る。半七が捻じ伏せるとお千という信州から来た老市子で、おころを殺したのはこのお千であつた。おころは一年前にお千から管狐を盗んで逃げた。日本中を探し歩き遂におころを見つけると、おころは団子坂の空地の古祠のなかに隠してあると言つたが、祠には狐はいなかつた。お千はだまされたと思ひ、おころを殺したが、やはりここに隠してあるのかと思ひ再び探しに来たのであつた。

五六日の後、幸次郎が平吉を挙げてきた。

平吉は、本郷片町の神原内蔵之助という三千石取りの旗本屋敷の馬丁であつた。神原は馬術を道楽にしていて、西洋馬を一度乗り廻

してみたいと思っていた。平吉は団子坂の騒動に通り合わせると原から褒美を頂戴しようとして西洋馬を牽いで出かけると、お角が来なかった。異人の紙入れを掏ったのはやはりお角で、続けて日本馬を一匹牽き出して行った。平吉は西洋馬の褒美に神原から一五両を貰ったが、日本馬は気に入られなかったので皮剥ぎ屋へ売ってしまった。

お角は平吉ばかりを可愛がっていたので幸次郎が長戚を捉まえて詮議すると、平吉への嫉妬から馬の一件をべらべら喋って、何もかも露見したのだった。平吉はおころの息子であったが、馬の一件と狐の一件は何の係り合いもなかった。お角は姿を隠してしまった。管狐はどうなったか判らない。

「季の文学」として

「半七捕物帳」は「季の文学」である、との評がある。白石潔は次のように述べている。

『捕物帳』は苛烈な戦争中、なぜ検閲と聞えたか。(中略) それは次の二つに分けることが出来やしないかと思ふ。

一、『捕物帳』が日本人の古来からの生活を左右する懐かしい『季の文学』であつたこと。

二、『捕物帳』が小市民生活者の郷愁性を持つていたこと(つまり人情的だつた)

『捕物帳』のデータである『季』は、わが国古代人がその生

活の基調を自然界に置き、この季節の推移は、古代から自然に對する尊敬と驚異を与え、実生活そのものもすべて自然の支配下に『機構』が建てられてあつたのである。

戦時中、軍閥と闘い得た『捕物帖』の本当の原因は、その文化性にある。そしてそれを愛した市民大衆にある。(中略) その二は『捕物帳』が小市民に人情的、愛情的であつたこと、人間の個々の(ごくつまらない人々も)生命を愛しつづけていたこと。¹⁾

ここでは「季節の推移」、そしてその下にある小市民の生活への「郷愁」を喚起する「季の文学」が「半七捕物帳」の性格として指摘されている。同作における江戸の自然風物や習俗の描写については、多くの論者が「季節感」「風物詩」「江戸情緒」「人情」あるいは「四季それぞれに応じた」「風俗や仕来たり」³⁾など表現を変えつつ大きな特徴として指摘している。

岡本綺堂自らの言葉で表すならば「江戸のおもかげ」がそれらに当たろう。綺堂は「はしがき」(『半七捕物帖』第一輯、新作家、一九二四年五月)において「江戸のおもかげ」の描写を「半七捕物帳」の「特色」として「普通の探偵的興味」と並置している。

若しこれらの物語に何等かの特色があるとすれば、それは普通

の探病的興味以外に、これらの物語の背景をなしてゐる江戸のおもかげの幾分をうかゞひ得られるといふ点にあらねばならぬ。
い。

作中で語りの「現在」から振返られ「郷愁」の対象となる「江戸のおもかげ」。それは本作「菊人形の昔」では何に該当し、作中でいかに機能しているのであろうか。本論ではそれらを明らかにしつつ、新しいテキスト解釈へと結びつけたい。

「菊人形」

物語の導入では、半七老人によつて回顧される「季節の推移」を表す「江戸のおもかげ」としての「菊人形」が紹介され、その場から「異人」騒ぎが生じ、本作での中心的な事件が出来る。

こんにちでも繁昌している団子坂の菊人形、あれは江戸でも旧いものじゃありません。いったい江戸の菊細工は——なるほど、あなた方の前で物知りぶるわけではありませんが、文化九年の秋、菓鴨の染井の植木屋で菊人形を作り出したのが始まりで、それが大当りを取つたので、それを真似て方々で菊細工が出来ました。明治以後は殆ど団子坂の一手専売のようになって、菊細工といえは団子坂に決められてしまいました。団子坂の植木屋で菊細工を始めたのは、染井よりも四十余年後の安政三

年だと覚えています。あの坂の名前は汐見坂というのだそうですが、坂の中途に団子屋があるので、いつか団子坂と云い慣わして、江戸末期の絵図にもダンゴ坂と書いてあります。

そこで、このお話は文久元年の九月、ことしの団子坂は忠臣蔵の菊人形が大評判で繁昌しました。

また、結末でも半七老人は「菊人形」に話を戻し、語りを締めくくる。

「……わたくしも暫く団子坂へ行きませんが、新聞などを見ると、菊細工はますます繁昌して、人形も昔にくらべるとたいへん上手に出来ているようです。」

このように、「菊人形」が導入、結末において、半七老人により語られる一八六一（文久元）年と作中の現在である明治二六、七年とに視点が往還する際の行路、「時間的な隔たりをつなぐ働き」⁵⁾として機能している。「ますます繁昌」という記述を考慮に入れると微妙な差異はあるようだが、いずれの時代においても「菊人形」が存在しているという意味において連続性を有している。本作においては、今はなき物事として振り返られる形で「郷愁」性を帯びているのは、事件と関わりつつ言及されてゆく「異人」「狐使い」といった「季」ならぬ「江戸のおもかげ」である。それらに比して「菊人形」が現在においても存在するという意味では、「季」の「江戸のおもかげ」

としての「菊人形」に郷愁性は薄いと言えよう。

また、「菊人形」から「菊人形の昔」への改題に言えは、「菊人形」自体が主題ないし振り返られる「江戸のおもかげ」ではなく、それに導かれた「昔」という時代性を主題としているため、「菊人形」から「昔」へ重心を移した表現への修正と考えられる。

「異人」「西洋馬」

これより、事件と大きく関わる形で言及されてゆく「江戸のおもかげ」について論じる。まず、「異人」について述べる。テキストでは、「過去」における「異人」の特殊な立ち位置について、度々半七老人の解説が交えられる。

九月二十四日昼八ツ(午後二時)頃に、三人づれの外国人がこの菊人形を見物に来たんです。その頃はみんな異人と云っていましたが、(以下、傍線は論者)

異人のめずらしい時代ですから、往來の人達はみんな立ちどまって眺めている。

半七老人は、「現在」における「外国人」は「過去」においては「異人」と呼ばれ認識も異なっていたことを説明している。ここで「異人」は、「現在」とは異なる認識として振り返られているという意味にお

いて郷愁性を帯びていると言えよう。ここからは「季節の推移」ではない「江戸のおもかげ」として「異人」への時代に即した認識が記述されることが理解できる。

異人嫌いの時代ですから、こうなると堪まりません。

事の仔細をよくも知らないで、相手が異人だから遣つ付けてしまえと、無我夢中で加勢に出て来る者もある。

また、「異人」はその異質性のために、蟹のお角のスリ行為を発端とした人々の暴徒化という事件の発端の動因となり、同時にそれが「現在」との距離感の表現ともなっている。

次に、「西洋馬」について述べる。

「馬を盗んで行った奴は素人でしようね」と幸次郎は云った。「商人ならば日本馬か西洋馬か判る筈です。西洋馬なんぞ売りに行けばすぐに足が付くから、どうで盗むならば日本馬を二匹牽き出しそうなのだが、……」

こんにちと違って、その時代における日本馬と西洋馬との相違は、誰が眼にも容易に鑑別される筈であった。第一に鞍といい、鐙といい、手綱といい、いつさいの馬具が相違しているのであ

るから、いかなる素人でも西洋馬と知らずに牽き去るはずがないと、彼は思った。

ほかの物と違って、生馬を戸棚や縁の下に隠して置けるはずもないのであるから、近在の大きい農家か武家屋敷のうちにつないであるに相違ないと半七は鑑定して、亀吉らにもその注意をあたえて置いた。

「主人の神原も馬泥坊お仲間ようですが、それには訳があります。(中略)このごろ異人が日本へ渡つて来て、西洋馬に乗り歩くのを見ると、馬も立派であり、馬具のたぐいも珍らしい。といって、その当時にはいくら金を出しても、西洋馬や西洋馬具を手に入れることは出来ない。おれもああい馬に西洋鞍を置いて一度乗り廻してみたいと、よだれを垂らしながら眺めているのほかはありません。」

ここでは「西洋馬」の異質性が、その消失の因となりそれ自体を推理行為の対象たらしめ、その発見のための手がかりともなっている。また、「こんにちと違って……」の件は、「異人嫌いの時代ですから……」の件同様に、「現在」との距離感の表現ともなっている。

このように、「異人」と「西洋馬」の両者は「季節の推移」を表現しているのではないが、「江戸のおもかげ」として「現在」との距離感を強調しつつ「郷愁性」を帯びて表現されている。そして、共に

その異質性から探偵小説テクストとしての事件発生と解決への道程に大きく関わっているのである。

「市子」「狐使い」「管狐」

次に、「市子」「狐使い」「管狐」について述べる。

半七らが坂下の空地で馬を探していると古祠のかけから「市子」が現れる。「市子」はおころといい「狐使い」でもある。異人の紙入れを盗んだお角の処に出入している平吉が、屋敷奉公をしているおころの息子ではないか、と半七は考える。おころは管狐を盗んだ相手である市子・お千に殺されてしまう。しかし、この殺人と「異人」の馬をめぐる事件は無関係であった。

市子は梓の弓を鳴らして、生霊や死霊の口寄せをするもので、江戸時代の下流の人々には頗る信仰されていたのである。

彼女が狐を使うという噂は五、六年前にも一度伝えられたが、その噂もいつか止んだ。それがこの春頃から再び伝えられて、彼女は尾先狐を使うとか、管狐を使うとかいう噂が立った。しかし彼女はいわゆる狐使いのように、自分の狐を放して他人に憑かせるなどということはしないらしく、唯その教えに依って、他人の吉凶禍福や失せ物、または尋ね人のありかを占うに過ぎないのである。したがって、別に他人に害をなすというのでは

ないが、ともかくも狐使いの名がその時代の人々を恐れさせて、彼女が付き合いを好まないのを幸いに、近所の者も彼女と親しむことを避けていた。

死に場所といい、その死にざまの怪しいのを見て、狐使いの彼女が狐に殺されたのであろうと、近所の者はおどろき恐れた。彼女は狐を夫にしていたが、近ごろほかに情夫をこしらえた為に、狐が怒って彼女を殺したのであると、まことしやかに云い触らす者もあった。彼女は自分の商売の種に狐を使いながら、碌々に毎日の食い物もあたえないので、狐が怨んで彼女を殺したのであると伝える者もあった。いずれにしても、怪しい市子の怪しい死について、いろいろの怪奇な浮説がそれからそれへと伝えられているのは事実であった。

彼女は一匹の管狐を養っていた。管狐は決してその姿を見せず、細い管のなかに身をひそめているのである。彼女は市子を本業としながら、その管狐の教えによって他人の吉凶を占っていた。

このように、作中には「市子」「狐使い」「管狐」といった語の説明が「異人」「西洋馬」同様に丁寧に挿入され、やはり「季節の推移」ではない「江戸のおもかげ」を「うかがい得られる」仕掛けとなっている。二つの事件は屋敷奉公の平吉を通じてわずかに交錯するに

過ぎない。しかし、「異人」「西洋馬」同様に、「市子」「狐使い」「管狐」もまた、「ともかくも狐使いの名がその時代の人々を恐れさせて……」といったように対象概念の認識の差を提示することで「その時代」Ⅱ「過去」と「現在」との距離を示唆している。

また、そうした「その時代の人々」の認識が、おころの「怪しい」「死にざま」に喚起され殺人事件を狐の犯行とする噂を招来するが、これは謎を論理的に解明してゆくという探偵小説への「怪異」的要素の導入と言つてよからう。論理的な事件の解明の過程が探偵小説の魅力としてあるのとは別に、「怪異」が本来的に持つ不可解性もまた、謎の持つ求心力を増幅することで読者を誘惑しているのである。そして、「管狐」は次のように結末で言及される。

おころが死んでしまったので、問題の管狐はどうなったか判りません。どこにか隠してあるか、逃げてしまったのか、そんなものが本当にあるのか無いのか、それらのことも判りません。

こうして、探偵小説としての謎——フーダニット——は解明しながら、一方で「怪異」という解けない謎を残し、解釈の余地を読者に委ねている。これも本作の魅力となっているのではないだろうか。

これまでの考察により、本作における「江戸のおもかげ」とその機能が明らかになった。先行論で度々言及の対象となった「季節の推移」を表す「江戸のおもかげ」としての「菊人形」は、現在との

連続性を有しているために郷愁性は他の「江戸のおもかげ」に比して相対的に薄い。一方、「季節の推移」ではないが、「異人」「西洋馬」「市子」「狐使い」「管狐」といった「現在」では馴染みのない概念に關して半七老人は説明を加えつつ回顧し、認識の差異を強調することで「現在」と「過去」との距離感をも表している。その意味では、これら「季」ならぬ「江戸のおもかげ」の方が本作では相対的に郷愁性を帯びて描かれていると考えられる。

そして、こうした一連の「江戸のおもかげ」の機能は、郷愁のみにあるのではない。「菊人形」は導入と結末において時代を往還する経路であり、「異人」はその異質性ゆえに事件の発端の動因となり、「西洋馬」は同じく異質性ゆえに消失の因となりそれ自体を推理行為の対象たらしめ、その発見のための手がかりともなり、「市子」「狐使い」「管狐」はその怪異性の持つ不可解さが謎の求心力を増幅し、さらに謎の一部に解釈の余地を残している。こうして本作においては、「江戸のおもかげ」はそれぞれが探偵小説の構成上不可欠または有効な要素として機能している。以上、「季の文学」という先行論の観点を出発点として本作におけるその固有性を抽出した。

語られる対象としての前近代と語る地点としての近代
さて、馬の消失をめぐる一件と、おこころ殺しの一件は、半七老人と「私」の間で次のように冗談交じりでまとめられる。

「……しかし馬の一件と、狐の一件とは、別になんの係り合いも無かったです」

「狐に馬を乗せたというわけですね」

「はは、しゃれちゃいけない……」

周知のように「きつねを馬に乗せたよう」とは、「ぐらぐらと動いて落ち着きのないこと。また、あいまいでつかみどころがないこと。言うことに信用がおけないこと」⁽⁶⁾を指す慣用語である。二つの事件がテクストにおいて「異人」「西洋馬」「狐使い」などといった概念にみられる「現在」との認識の差異を中心に語られていることを考えるならば、このまとめは「一つの話が（「私」を含む現代人にとって）「つかみどころがない」「信用がおけない」話である」という意味で、「現在」との歴史的断絶を指し示していると考えられる。このことは、後に続く半七老人の「感慨」からも伺える。

「今どきの方々にお話し申しても、とても本当にはなさるまいが、江戸時代には狐使いという者がいました。」

「……わたくしも暫く団子坂へ行きませんが、新聞などを見ると、菊細工はますます繁昌して、人形も昔にくらべるとたいへん上手に出来ているようです。しかし団子坂の菊人形を見物に行く明治時代の人達は、三十余年前にここで異人を殺してしま

えと騒いだり、狐使いが殺されたりした事を夢にも知りません。世の中はまったく変わりました。異人だの狐使いだのという言葉さえも消えてしまいました。菊人形の噂を聞くたびに、わたしは昔のことが思い出されます」

ここでも半七老人は「異人を殺してしまえと騒いだり、狐使いが殺されたりした事」に郷愁を感じ、「現在」の「明治時代の人達」は「夢にも知りません」と歴史的断絶を強調している。

古歌に「月やあらぬ、春やむかしの春ならぬ、わが身ひとつは本の身にして」とある。半七老人の感慨もそれに似たものがあるらしい。私もさびしい心持で、この筆記の筆をおいた。

「月」や「春」のように、「季節の推移」を表す「菊人形」という「江戸のおもかけ」は、「現在」においても存在する。しかし、「異人」「狐使い」に対する人々の認識は歴史の変遷により移り変わり、〈前近代〉から〈近代〉へと大きく時代は変化した。そうした半七老人の「心持」を汲んで、「私」が「さびしい心持」となることでテキストにおける前近代への「郷愁」が増幅されている。「半七捕物帳」において、半七老人が語られる「過去」に属し、「私」が語りの「現在」に属している点から言えば、「現在」に属する「私」の、「過去」に属する半七老人に対する共感が、テキストに反近代的志向性を付与している

と言える。

それでは、本作における語られる対象としての前近代、語る地点としての近代はどのような時代として表象されているのだろうか。

語られる「過去」は一八六一(文久元)年、幕末の攘夷運動盛んなりし頃である。「異人」を襲う事件が各地で相次ぎ、一八六二(文久二)年の生麦事件などはその代表例である。作中で語られる団子坂の異人騒動も、史実が背景にあり、綺堂の参照したことで知られる『武江年表』^⑤には一八六六(慶應二)年八月に類似の事件の記録がある。つまり、西洋諸国の排撃という思想が市井においても暴力的な形で噴出していたことが時代背景としてある。

また、「市子」については、

- ① 神前で神楽を演奏する舞姫。神楽女(かぐらめ)。神巫(みこ)。一殿(いちどの)。いち。
- ② 生霊(いきりょう)、死霊(しりょう)を神がかりして招きよせ、その意中を語る職業の女。梓巫(あずさみこ)。口寄(くちよせ)、巫女(みこ)。^⑥

「狐」については、

狐はオサキとかミサキとも呼ばれ、神の使わしめとも考えられており、その姿を見たり声を聞いたりした者は、何らかの神意

を感じた。人知の及ばぬことを、狐の挙動や鳴声によって知る伝承は多く、狐の霊を人につかせ、神の託宣を聞くのが村の恒例行事になっている所もある。(中略)しかし、託宣には不確定な要素が伴い、特にこれにあずからない者は不安で不吉なイメーヂをいだき、狐は次第に靈威あるものへと考えられた。⁽¹¹⁾

「管狐」「狐使い」については、

憑きものの一種で、中部地方を中心として関東地方にも分布する。クダ狐は、仔猫ぐらい、馳ぐらい、あるいはマツチ箱ぐらいの大ききで七五匹に増える動物などと伝承されている。この動物が靈的能力を持つてるとみなされ⁽¹²⁾(後略)

クダ狐は、ある特定の家に飼われているものというより、ある特定の術者に使われているものというような性格が甚だ強い。⁽¹³⁾

と、それぞれ半七老人が語りの中で加えていた解説が歴史的事実に相違ないことが確認できる。また、「管狐」を使う老市子のお千の出身が信州であるという設定が事実を踏まえていることも、「何といつてもクダの中心はやはり信州であろう⁽¹⁴⁾」とする資料から首肯されよう。

一方で、語る地点としての近代では、それらの概念や概念に対す

る認識が変化する。

半七老人は「異人」が「外国人」へと呼び名が変わったことを指摘しているが、それに伴うようにイメーヂも異なってくる。一八八五(明治一八)年に福沢諭吉が「脱亜論」を唱えるが、この時代のスローガンは「脱亜入欧」であり、「異」国であった「欧」はもはや目標とし「入」るべき領域となっていた。語りの「現在」に接した一八九四(明治二七)から九五(明治一八)年にかけての日清戦争は「外国」と「同じ」帝国主義政策の競争としての面が強かった。かくして、「異」人は「同じ」領域に属する者となっていた。

そして「市子」は、文明開化の中、一八七三(明治六)年一月一日の教部省達で「従来梓巫市子並憑祈禱狐下ケ杯ト相唱玉占口寄等之所業ヲ以テ人民ヲ眩惑セシメ候儀自今一切禁止⁽¹⁵⁾」と操狐や占い等を禁じられ、一八八〇(明治一三)年公布の「刑法」中「違警罪第四二七条第一二項」に「妄ニ吉凶禍福ヲ説キ又ハ祈禱符呪ヲ為シ人ヲ惑ハシテ利ヲ図ル者⁽¹⁶⁾」とあるように、犯罪として処罰の対象になる。

同様に、「狐」に対する見方も、

憑狐ト唱ヘテ発狂ニ似テ発狂ニ非ズ(中略)真二野干二精魂ヲ奪ハル、如キ怪状ヲ発スル症アレドモ、是レ亦一種奇症ノ神經病ニシテ、野狐眩惑ニ因テ狂言妄語スルニ非ズ、神經奇怪ニ鋭敏変性シ、意外ノ靈妙知覚機トナリテ、過古未然ノ事掌ヲ指

ス如ク言語スル故、世人驚愕シテ野狐ニ眩惑サル、如ク誤リ認ルナリ、怪ムニ足ラズ。諺ニモ云フ、人ハ万物ノ靈トモ云フ、貴徳アルモノ野狐ハ微々タル山間ノ陰獣、何ゾ動物ノ長タル者ヲ眩惑スル神通アラシヤ。¹⁷⁾

と、「万物ノ靈」として人間中心主義的価値観が西洋から導入された結果、「山間ノ陰獣」として貶められるに至った。『読売新聞』（一八八二(明治一五)年三月一〇日朝刊)には、「埼玉県北足立郡九左衛門新田」の六人家族が発狂し、周囲の者がその因を「神主」に伺うと「管狐」の仕業であるとの「御託宣」が出、その狐使いを「打殺せ」との話になったが、警察が医者を連れて「療治」すると全快した、との記事がある。一八八五年にはベルツが「狐憑病説」において狐憑きは「精神障害の一種」としている。¹⁸⁾ こうした「狐」観の変化が語られる対象の「過去」と語りの地点の「現在」の間に横たわっている。このように、「怪異」としての「市子」や「狐」が右のような国家主導の啓蒙主義および近代科学の導入により駆逐された地点から、非合理的な「怪異」という存在に対し「郷愁」を込めて「過去」が語られているのである。

以上の考察を通して、「季の文学」としての「半七捕物帳」という観点から本作を分析し、さらに語られる対象としての前近代と語る地点としての近代を比較することで本作における「郷愁」の意味を探った。すなわち、「半七捕物帳」において振り返られる「江戸のお

もかげ」は当時の「異人」観のような、「人情」「愛情」といったヒューマニズムに回収する事の出来ない暴力性や、「狐使い」のような近代科学や合理主義・啓蒙主義から駆逐された非合理的怪異をも孕んでいた。このことは、「半七捕物帳」の価値的な批判では無論ない。むしろ、そうした前近代性を郷愁を込めて語り、「現在」におけるその非在を新世代の「私」が旧世代の半七老人に寄り添い「さびし」がることを、語る地点としての近代を相対化する試みとして評価できよう。

注

- (1) 白石潔『探偵小説の郷愁について』不二書房、一九四九年二月
- (2) 野崎六助『捕物帳の百年 歴史の光と影』彩流社、二〇一〇年七月
- (3) 今井金吾『半七捕物帳』大江戸歳時記 ちくま文庫、二〇〇一年一月
- (4) 今内孜編『半七捕物帳事典』(国書刊行会、二〇一〇年一月)の考証による。
- (5) 浜田雄介『捕物帳と環境——半七捕物帳「奥女中」を例として』渡辺憲司・小峯和明・ハルオ・シラネ編『環境という視座 日本文学とエコクリティシズム』勉誠出版、二〇一一年七月
- (6) 「半七捕物帳」における「解ける謎」と「解けない怪異」につ

いては、浜田雄介「超常能力と大正中期探偵小説」『怪異を魅せる』（青鳥社、二〇一六年十二月）を参照されたい。

- (7) 『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇〇年十二月～二〇〇二年二月

- (8) 浜田雄介「超常能力と大正中期探偵小説」『怪異を魅せる』青鳥社、二〇一六年十二月

「確認しておく」と、「半七捕物帳」の事件はリアルタイムで描かれるのではなく、「わたし」がおよそ日清戦争後（当初の設定は日露戦争後）に半七から話を聞き、それを大正以後の時代に書き記すという形をとっている。半七は、旧時代の怪異が合理主義によって駆逐されつつある近代という時代に、旧時代の老人として新時代の若者に話をしているのである。」

- (9) 「史実・英国人の団子坂騒動」今内孜編『半七捕物帳事典』国書刊行会、二〇一〇年一月

- (10) 『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇〇年十二月～二〇〇二年二月

- (11) 桜井徳太郎『民間信仰辞典』東京堂出版、一九八〇年十二月
- (12) 桜井徳太郎『民間信仰辞典』東京堂出版、一九八〇年十二月

- (13) 石塚尊俊『日本の憑きもの 俗信は今も生きている』未来社、一九五九年七月

- (14) 石塚尊俊『日本の憑きもの 俗信は今も生きている』未来社、一九五九年七月

- (15) 『法令全書 明治六年』内閣官報局、一八八九年五月

- (16) 『法令全書 明治十三年』内閣官報局、一九一二年七月

- (17) 増山守正『旧習一新』二書堂、一八七五年十二月（引用は、吉野作造編『明治文化全集』第二〇巻 文明開化篇、日本評論社、一九二九年四月）

- (18) 金子準二編『日本狐憑史資料集成 続』金剛出版、一九六七年

五月

「吉良の脇指」小考

岸 本 梨 沙

「吉良の脇指」は昭和十(一九三五)年『講談倶楽部』十月号に発表された半七、十五番目の事件だ。梗概は次の通りである。

極月十三日の夕刻、半七老人宅を訪れた「私」は煤掃きから縁を引いて大石の一党が吉良の屋敷へ討入りした話を聞く。忠臣蔵の講釈が始まるかに思えた半七老人の話は、意外なことに吉良の脇指がかたき討ちに使われた話へと移っていった。

事の発端は嘉永六(一八五三)年十二月のはじめのこと。半七は出会った鶴吉から、旗本福田左京の妾になった鶴吉の姉お関が左京とともに殺されたという話を聞く。下手人である伝蔵の行方は知れず、母に言われ、かたき討ちを決意した鶴吉は半七に伝蔵のありかの搜索を依頼する。半七は当初渋るものの、鶴吉の強情を憎むことも出来ず協力を約束するのだった。

伝蔵のありかを探すため彼と密通していたお熊の実家へ向かうが、そこで半七は遠州屋才兵衛と遭遇する。不思議な廻り合わせで、お熊はこの才兵衛の店で奉公しているという。それを知った自分の善八は才兵衛とお熊が男女の仲だと推測し罵倒するのだった。

明くる年の嘉永七(一八五四)年の春、伝蔵の居所が一向に掴めない中、才兵衛が何者かに殺害される事件が出来る。半七は下手人を伝蔵と想像し、お熊に話を聞きに向かう。その結果、才兵衛が

お熊の実家に行った目当てが雁の羽であることが判明。その羽を売り込みに行った帰りに殺害されたことも後に判明する。才兵衛とお熊との間に男女の関係はなかったのだ。それを知った半七は伝蔵が才兵衛を殺した理由を半七達同様の勘違いをし、二人の間に主従以上の関係があるように疑い殺害に及んだのだ、と推測するのだった。

しかし伝蔵の行方は一向に知れない。七月九日、浅草観音に神頼みにも、と思いつき出かけようとした半七は一朱銀を目にして、ふとお台場の人足に伝蔵が紛れ込んでいたのではないかと、思いつく。それは見事的中し、半七は漸く伝蔵の居所を掴むことができたのだった。

その後、鶴吉は見事吉良の脇指でかたき討ちを遂げるのだった。どこまでも縁を引いているのも不思議で、わけを知らない人が聞いたらこしらえ話のように思うかも知れない、と半七老人は笑い、話を締めくくるのであった。

さて、本作冒頭、半七老人は今回の事件に関して次のように語る。

物事はさかさまになるもので、かたきを討たれた吉良の脇指が、今度かたき討ちのお役に立つ。どうも不思議の因縁ですね。(以下、傍線は論者)

「縁」、そして「さかさま」という二つの言葉を軸に本作を考えていくと、本作中には様々なもの同士に「縁」があり、様々なものが「さ

かさま」な存在と言うことができる。そこで、本作中における「縁」と「さかさま」について考察を行い、本作がどのような意味を持つ作品であるかを明らかにしたい。本論において、「縁」は物語上で使用される道具や登場する場、出来事など同士を必然的に繋ぎ合わせる役割を担うものとし、「さかさま」は本来ならば同時に両立しえない事柄が同時に成立してしまっている状態を指すこととする。

「縁」で繋がる事件

まず「縁」についての考察をしていくにあたり、最初に本作における中心的な存在であり、また様々なものと「縁」のある「吉良の脇指」について考えていきたい。

「吉良の脇指」とはその名の通り吉良が所有していた脇指だが、ここで吉良は当然のごとくと言うべきか、赤穂事件で討たれた吉良上野介のことである。本作における「吉良の脇指」は吉良上野介が所有していた脇指であり、それが福田左京の家に伝来していたということになっている。では、登場人物たちはそんな「吉良の脇指」をどのように受け止めているのか。少し長くなるが本文を引用してみたい。

「先祖伝来はともかくも、好んでそんな物をさすと云うのは、よっぽどの物好きだね」

「物好きといえば物好きです。吉良の脇指というので、代々の

殿さまは差したこともなく、土蔵のなかに仕舞い込んであったのを、先年虫ぼしの節に、今の殿さまが御覧になって、どこが気に入ったのか、自分の指料にすると仰しゃいました。そんな物はお止めになったが好かるうと云った者もありましたが、殿さまはお肯きになりません。(…)姉はふだんから其の脇指のことを気にしています、吉良の脇指なんぞは縁起が悪いと云っていました、やつぱり虫が知らせたのかも知れませんが――

「刀の祟り」ということは、昔からよく云いますが、吉良の脇指なども良くないでしょうね」と、直七は仔細らしく云った。

「吉良の脇指も村正と同じことかな」と、半七はほほえんだ。

考えてみると、かたき討ちの場所は高輪で、例の泉岳寺の近所、脇指は吉良の物、どこまでも縁を引いているのも不思議で、訳を知らない人が聞いたら、こしらえ話のように思うかも知れませんが――

指料としていた福田左京は別として、「吉良の脇指」は「縁起が悪い」や「刀の祟り」という言葉に象徴されるように余り良い印象を持たれてはいない。半七も「吉良の脇指」をさすのは「物好き」と評したり、妖刀「村正」と同じかと評したりもする。この印象は『仮名手本忠臣蔵』を始めとした創作物における吉良上野介が敵役となっていることが大きな原因だろう。そしてその印象やお関が「縁起が

悪い」と言った通り、「吉良の脇指」は殺人事件を引き寄せてしまう。さらに「吉良の脇指」が引き寄せたものはそれだけではない。「どこまでも縁を引いている」と半七が語るように、「吉良の脇指」は忠臣蔵がそうであったように、敵討ちをも引き寄せてしまう。ではこのような「吉良の脇指」に縁を引かれた敵討ちと、その捜査はどのようなものだったのか。

本作における敵討ちといえば、もちろん鶴吉が行った架空の敵討ちだ。しかしその鶴吉の敵討ちの相手である伝蔵は行方が知れない。そこで鶴吉が敵討ちの助けを求めたのが、岡つ引き、半七であった。

半七の捜査と言えば、良く言えば縛られない自由さがあり、悪く言えば勘に頼る行き当たりばつたりの力業で解決するところがある。もちろん、これが『半七捕物帳』と半七の味と言えば味なのかもしれないが。ともかく、本作における捜査はどのように進行し、どのように半七は犯人に辿り着いたのか。ざっと時系列順に並べると次のようになる。

嘉永六年十二月初旬、捜査開始↓お熊の実家へ向かう↓一月末、子分から伝蔵の目撃情報を得る↓二月、お辰が伝蔵に襲われる↓同月十九日、お熊が伝蔵と遭遇↓同月二十一日、才兵衛殺害↓七月、伝蔵のありかを掴む↓同月十二日、鶴吉が敵討ち

このように嘉永六年十二月から始まった捜査は、結局嘉永七年七月にまで及ぶ。ではこの事件は、半七が長い時間をかけ地道に捜査をして解決に導いたのかといえ、そんなことはない。今回の事件

が解決したきっかけは「神頼み」であった。七月九日、半七は「苦しい時の神頼み」という心持ちで浅草観音の四万六千日への参詣へ行く支度をしていた。その際、手にした小遣いの中に一朱銀を見つめる。一朱銀、別名お台場銀は嘉永七年の正月から流通し始めたものであるが、それを見て半七は「ふと何事か思いつく。そしてこの思い付きにより犯人、伝蔵のありかを発見し、鶴吉の敵討ちへとんとんと事は進むことになった。

このような捜査と解決について半七老人は次のように語る。

「なぜ早くに気がつかなかつたかと、今でも不思議に思うくらいです。お台場の一朱銀などは始終見ているくせに、なんにも気がつかずに過ぎていて、ふいと思いつくと、それからとんと順序よく運んで行くのも妙です。こうなると、自分の知恵じゃあない、神か仏が知恵を貸してくれたようにも思われますよ」

事件解決のために神頼みでもしようか、と思った矢先に「神か仏が知恵を貸してくれた」結果、犯人に辿り着く。半七の言う「不思議の因縁」による解決であった、と言っているだろう。また、普通であれば出来過ぎた解決と思われかねないような解決かもしれないが、「縁」が冒頭からクローズアップされる本作であれば、読み手はあり得ることだと感じてもおかしくはないだろう。

しかし、ただ単純に神か仏の知恵だけに導かれて解決した、とは言いにくい側面もある。というのも、捜査が進まなければ、半七とて普段は考ええないような極々小さな可能性も見落とさないように目を光らせ、思考を巡らせていたことだろう。このようなことが半七の中で起きていたとすれば、普段は結び付けないような「縁」をも半七が手繰り寄せ、結び付けていた可能性は充分にある。つまり、ちよつとした偶然で手にした一朱銀〇お台場銀を見たことにより、常々考えていた小さな可能性の一つを手繰り寄せたということになるうか。

何にせよ「縁」での解決をみた敵討ちであったが、事件解決のきっかけがお台場銀であったこと、犯人の潜伏先がお台場だったことは「吉良の脇指」が本事件に深く関わっていることを考えると、これは「吉良の脇指」に縁を引かれた結果だと言うことができる。

『武江年表』下（筑摩書房、二〇〇四年二月）には、嘉永六年「九月より、品川沖に砲台（御台場と云、新規築立御用始る」とある。そも、嘉永六年と言えばかの有名なペリーが日本に來航した年である。『武江年表』下（前掲）にも「六月三日（陽曆七月八日）、北垂墨利加合衆國華盛頓使節（正使マツテウ〇セロペルリ）の船、大小四艘、相州浦賀の要津に舶し貿易を乞ふ。」とその様子が記されている。この來航をきっかけに、江戸防衛のため建設が決定したのがお台場であった。

さて、敵討ちをされる側、犯人役の伝蔵が潜んでいたのがそんな

お台場であった。ここで、先で引用した『武江年表』下（前掲）の続きをさらに引用したい。そこには「御殿山并泉岳寺門前の山を崩し、此土を以て御台場の用に宛らる」という記述がある。御殿山は高輪にある高台であるが、問題は泉岳寺だ。泉岳寺といえ半七老人が本作中でも語っているように、赤穂浪士の遺品が宝として納められている寺である。敵を討った側の遺品がある寺の門前の土が、敵を討たれる側が潜む場に使われる。これもまた「吉良の脇指」が引き寄せた「縁」の一つであろう。

「芝居」、あるいは「こしらえ話」

以上のように「縁」というキーワードから事件を見ていくと、本作は「吉良の脇指」から縁を引かれた敵討ちを題材とし、赤穂浪士に縁深い泉岳寺と縁のあるお台場に犯人が潜伏し、そのお台場が原因で作られたお台場銀によって事件が解決する。

そしてそれらを半七老人は最後に、先で引用したように「こしらえ話」という言葉で統括する。実際、作中では半七と自分の会話の中で鶴吉の敵討ちに対し「芝居」という言葉が使われたり、「虚無僧にでも姿をやつして」と敵討ちが題材の芝居の内容を持ち出したり、最後の敵討ちの場面でも「芝居ならば、わたくしが座頭役で」と述べたりする。また、冒頭で「私」が「極月十三日と大時代に云った方が何だか釣り合いがいいようである」と大袈裟な言い回しをしたりと、「こしらえ話」や「芝居」らしくみせる装置がいくつか散りば

められている。また、この装置の一つに「吉良の脇指」をタイトルにしたことも含まれよう。岡本綺堂という筆者の存在、「吉良」というタイトル、それだけで読み手は「忠臣蔵」を想起して「芝居」のような、「こしらえ話」のような話であると考えてもおかしくはない。そうでなくとも冒頭で忠臣蔵の話題が出ているのだ。否が応にも読み手はそのような感覚を持つてしまうはずだ。つまり、本作はその内容を読む前から読み手に前提として「芝居」や「こしらえ話」のような事件である、と考え読むことを求めていると言える。

では、このように誘導することによってどのような効果が生み出されるか。それは先に述べたような、作中における「縁」を意識させる効果であろう。忠臣蔵ならば敵討ち、泉岳寺の近くの高輪やお台場——といった具合に。

よつて、本作を「縁」という視点から解釈すると、「吉良の脇指」から想起される忠臣蔵と関係の深い、敵討ちを題材にした「芝居」や「こしらえ話」のような作品である、ということが出来る。

さて、ここでもう一つの視点、「さかさま」から以上のことを改めて捉え直してみたい。そうすることにより、本作の解釈は全くの「さかさま」になると考えられる。

「さかさま」を内包する事件

「さかさま」から事件を捉え直すにあたり、やはりまずは「吉良の脇指」から話を始めたい。先で指摘したように、作中における「吉

良の脇指」には悪いイメージが付きまどっている。しかし話が進むと、その印象は一種の「宝物」という認識に変わってくると考えられる。半七老人が冒頭で「義士の持ち物は泉岳寺の宝物になつて残っています」と述べ、敵討ちを行った側の遺品が「宝物」であることを示す。であるならば、最終的に「本当のかたき討ち」をすることができた「吉良の脇指」も「宝物」になつたと言ふこともできよう。鶴吉が敵討ちを遂げることによって、敵役の「吉良の脇指」が、泉岳寺に宝として納められた赤穂浪士たちの遺品と同じものへと昇華してしまうのだ。忌み嫌われる面と「宝物」としての面の二つを持つ「吉良の脇指」は、敵を討たれた吉良の持ち物で敵を討つという意味だけではなく、このような意味での「さかさま」をも内包しているのではないだろうか。

では、この「吉良の脇指」が縁引いた敵討ちはどうだろうか。本作における敵討ちはもちろん、鶴吉が行った敵討ちではあるが、それと同時に作中では別の敵討ちの話が登場する。嘉永六年十一月二十八日の浅草天王橋の敵討ちと、嘉永七年六月二十六日の日本橋住吉町での敵討ちだ。共に『定本 武江年表』下(前掲)に記載があり、実際に起こった敵討ちであることがわかる。特に前者の敵討ちに関しては作中で描かれた詳細が、実際の出来事と相違無いものであることも知ることができる。⁴⁾

しかしこの敵討ち、実は敵討ちではなかったのではないかという疑いがある。氏家幹人の「かたき討ち」(中央公論新社、二〇〇七年

二月)は『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第五卷(三一書房、一九八九年五月)の記録を引用しながら「与右衛門殺害は、妹による兄の敵討といった美談でも快挙でもなく、仁兵衛が仕組んだ罠、「密謀」に違いない」と述べる。続けて「いずれにせよ殺人行為である敵討が奇麗事でないのは事実で、敵討を装った(敵討にかこつけた)犯罪行為があったとしても不思議はない」とも述べる。

綺堂が知っていたかは定かではないが、このことは敵討ちが本質的に孕む矛盾を示唆してはいないだろうか。氏が述べるように敵討ちはいくら理由をつけようとも「殺人行為」である。しかしかつて、江戸という場で敵討ちは鶴吉の母が言うように一応は「天下御免」であった。罪であるはずの殺人が、敵討ちであるという一点で半七をして「見事」と言わしめたかもしれない行為へと変貌する。真偽の程は今となってはわからないにせよ、浅草天王橋のそれも、敵討ちに偽装すれば罪に問われないことを前提とした殺人事件だったのかもしれない。このように敵討ちは、犯罪という側面と、ある種の正義という側面という矛盾するものを孕んでしまっている。これも一つの「さかさま」の形であろう。

さて、敵討ちを「見事」と考える半七、そんな半七自身のことを考えていくと彼自身もまた「さかさま」を内包しているように思われる。

岡本綺堂は大正十四(一九二五)年に発表された随筆「敵討ち雑感」(『岡本綺堂随筆集』岩波書店、二〇〇七年十月)で「幕府の方針として、

かたき討を公然禁止したわけではないが、決して奨励してはいなかった。なるべく私闘を止めさせたいのが幕府の趣意であった。」と述べている。このような幕府の立場はもちろん、罪人を取り締まる半七にとっても重要な意味を持っていただろう。事実、半七は鶴吉から姉や左京の敵を討ちたいと話を聞いた際には次のように考え、鶴吉を諭す。

姉のかたきと云えば云われるが、伝蔵のような罪人は公儀の手に召し捕らせて、天下の大法に服させるのが当然であつて、私のかたき討ちをすべきでは無いと、半七は云い聞かせた。

このことから、半七が幕府の意向に沿った立場を一先ずはとつていることがわかる。ではこのような態度を半七がとり続けたのかと言えば、そうではない。

一途に思いつめた若い者に対して、半七はいろいろな理解を加えたが、彼はどうしても肯かないのである。しかも半七はその強情を憎むことも出来なかった。

「それほど思い詰めたら仕方がねえ。まあ、思い通りにかたき討ちをおしなせえ」

このように鶴吉の敵討ちを私情で認め、結果として幕府の意向に背

く形になつてしまふ。

ここで改めて半七の職業である岡っ引きがどのような職を確認したい。岡っ引きは目明しとも言つうが、同心が捜査などの活動のために私的に雇う町人身分の者を指す。つまり岡っ引きは幕府に協力しながらも、幕府の内側には取り込まれていない、非常に曖昧な存在なのだ。そしてそんな曖昧な存在であるからこそ、一方では幕府の意向の通りに私闘を止めるが、一方では鶴吉の強情を憎むことも出来ず敵討ちを許すという「さかさま」を内包することになつてしまつたのだと考えられる。

ところで、半七の捜査の結果、犯人である伝蔵はお台場に潜伏していることが判明したわけだが、このお台場という場も「さかさま」を内包した場ということが、綺堂の言葉からわかる。明治四十四(一九一一年)年の随筆「一日一筆」(前掲『岡本綺堂随筆集』)で、綺堂はお台場について次のように語っている。

かの「お台場」は、泛ぶが如くに横つたっている。今更ではないが、これが江戸の遺物かと思うと、私は何とはなしに悲しくなつた。

今日の眼を以て、この台場の有用無用を論じたくない。およそ六十年の昔、初めて江戸の海にこれを築いた人々は、これに依て江戸八百八町の人民を守ろうとしたのである。その当時の徳川幕府は金がなかつた。己むを得ずして悪い銀を造つた、随つて物価は騰貴した、市民は難渋した。また一方には馴れない工

事のために、多数の死人を出した。かくの如く上下ともに苦みつつ、予定の十一カ所を全部竣工するに至らずして、徳川幕府も亡びた、江戸も亡びた。

「江戸の遺物」であるお台場は、人民を外敵から守るために築かれたはずであつた。しかし蓋を開けてみれば、物価の高騰を招き、多数の死者を出すという事態を招き、拳句の果てに江戸の滅亡までも呼び込んでしまふ。もちろん、お台場という場がそうしたわけではないが、綺堂にとつてみればお台場は江戸滅亡のシンボルの一つという認識だつたのだろう。このように守るはずが滅亡を招く、お台場は「さかさま」を内包する存在と言えよう。

「さかさま」な「こしらえ話」

以上のように、縁で結ばれたものたちは、同時に「さかさま」を内包しているということも出来る。そうであるならば、縁がある、「こしらえ話」のようである、というそれぞれの認識にも「さかさま」が潜んでいるとは考えられないだろうか。つまり、縁は存在せず、こしらえられた話とも読めるのではないだろうか。

例えば「吉良の脇指」だが、「吉良の脇指」が縁を引くというが本当にそうなのだろうか。「吉良の脇指」は確かに吉良上野介の脇指だ。しかし脇指は脇指であり、それ以上の何物でもない。それが敵討ちに使われることは確かに奇縁と言えは奇縁かもしれないが、奇縁で

ある」と感じる主体は紛れもなく、奇縁である」と感じる側、つまり半七や「私」そして読み手である。

あるいは、お台場としてそうだ。確かに泉岳寺に縁があることにはあるが、半七が作中で述べているように、お台場の人足は犯罪者が隠れるにはうってつけの場だ。そう考えれば、お台場という場を選んだのは縁のためではなく、作品上の都合ということになる。あるいは、お台場銀での解決は縁だ、とも述べたが、あれとて本作を成立させるための手法でしかなかったのかもしれない。敵討ちといえどかく時間がかかるものであるが、逆に考えれば時間をかければ成功する確率が上がることをも意味する。鶴吉のそれとて、時間をかければこんな解決法でなくとも叶った可能性も高い。とはいえ『半七捕物帳』でそんな悠長なことはしてられない。その時に綺堂が頼らざるを得なかったのが、お台場銀からお台場を連想させる解決法だった可能性はある。縁による解決ではなく、創作上の余儀無き手法というわけだ。

このように、先で縁があると述べたものたちは、全く縁などなかったかもしれないという可能性が生まれる。そして読み手は先で指摘したようにタイトルの「吉良の脇指」、冒頭での忠臣蔵の話などから今回の事件が忠臣蔵に関係するだろう、と誘導される。では、誘導されることによって、どのようなことが起こるのか。それは、無かったはずの縁を繋ぎ合わせることで物語を「こしらえ」てしまう、という現象ではないか。つまり、縁がある」と感じた主体が、本事件

を「縁に引かれた話」とあると、「こしらえ」てしまう。本来ならば縁は引かれていくものであり、事件は捜査や物的証拠により進行していくものであるはずである。しかし今回、縁は引かれるものではなく、見る主体が引くものとなり、事件は進行するものではなく縁に引かれて進行したのだと「こしらえ」られるものとなってしまっているのではないだろうか。

このように、「縁」を中心に考えると「縁」に引かれていく物語も、「さかさま」を中心に考えるところ本作を成立させるための手段や必然であった可能性が生じる。また読み手が「芝居だ」、「こしらえ話だ」と思う点についても、この事件を受け取った主体が事件を「こしらえ」てしまっているのではないか、という可能性が示唆される。したがって、本作は忠臣蔵に関連する出来事同士が縁で結ばれていく「芝居」や「こしらえ話」のような話であるとも読める。しかし、それと同時に、創作上の都合により一見縁がありそうな物事を並べたがゆえに、読み手によりこしらえられた話とも読むことができる。本作はそのような矛盾する「さかさま」を内包していると言える。そしてそのことを通し、書かれた作品を自分の意図とは切り離れたものと考えていながら、実は事件を受け取った主体が物語を「こしらえ」てしまっているのでは、という「さかさま」を読み手に突き付けているのではないだろうか。

最後に、本論では余り触れてこなかったが、本作には時間の問題も一つ横たわっている。解決に時間のかかった捜査、とかく時間

のかかる敵討ち。あるいは時間の流れの中で敵を討たれる側が敵を討つ側になり、最後には行方知れずになった「吉良の脇指」や、守るはずが滅亡を招き今や「遺物」として見向きもされなくなったお台場もそうだろう。そして、冒頭に唐突に出現する「今の私」^②物語を記す「私」と過去の私^①半七老人から話を聞く「私」との距離もそうであろう。これらの中には過去から現在へと流れる時間の中で現実が郷愁へ変質してしまった、今は無きものを忍ぶ思いがうかがえるようにも思われる。

注

- (1) ここまで捜査が行き詰まった原因の一つは、本作の事件に敵討ちが関わっているからでもあろう。『考証 江戸事典』(人物往来社、一九六四年三月)の「敵討」の項には、「一年、二年で敵にめぐり逢うのはよほど運のいい者で、十年、二十年、甚しいのは新発田藩士久米幸太郎兄弟の四十一年、とませ宥憲母子の五十三年というのさえある。」とある。
- (2) 『武江年表』下(前掲) 嘉永七年の項に「正月より一朱銀通用始る。」とある。
- (3) 『武江年表』下(前掲) にそれぞれの敵討ちについて「浅草天王橋に於て、常陸国破賀村幸七妹たか、叔父の助太刀にて兄の^{かたき}讐与右衛門を討つ。」「同二十一日夜、住吉町往来に於て、太

田六助(二十九歳)、親の^{かたき}讐山田金兵衛(五十二歳)を討つ。」とある。

(4) 『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第五卷(三一書房、一九八九年五月)にこの敵討ちの詳細が書かれている。

(5) たかの父

(6) 作中、半七は「なにしろ大勢の人足を使うのですから、どこの人入れでも一々その身許詮議などをしちやあ居られません」と述べたり、「伝蔵のような奴の隠れ家にはお詛え向き」と述べたりしている。

(7) 「二日一筆」(前掲『岡本綺堂随筆集』)には「しかし電車で帰宅を急ぐ諸君は、暗い海上などを振向いても見まい。」と、誰もがお台場へ目も向けないという趣旨のことが書かれている。

(8) 作品冒頭において「今の私ならば、そこらをひと廻りして、いい加減の時刻を見測らって行くのであるが、年の若い者はやはり無遠慮である。」と語られている。